

4月下旬になるものと思われる。この羽化時期を説明するものとして、県下に於ける最も遅い記録(1977年11月20日)を引き合いに出してみた。この日採集したものは1頭にすぎないが、他に新鮮な個体を3頭目撃している。11月20日以前5日間の採集地(竜野市)の気温をみると、平均最低気温8.8℃、平均最高気温19.4℃となっている。これは1978年同地の4月の温度と比較すると、4月25日ごろの温度にほぼ一致する。

4月下旬～5月上旬にかけて羽化した成虫は、食草の葉の裏や表に1ヶづつ産卵する。フ化した幼虫は発育を続け、6月上旬には食草の葉、茎、付近の小さな草本植物(ツタの葉裏など)に蛹化し、6月中旬に第2化が発生する。

5月上旬に採集した個体から採卵し、野外で累代飼育をした結果をみると、5月14日産卵、6月24日第2化が羽化し6月30日に産卵、8月9日に第3化が羽化している。その後飼育は失敗し継続できなかったが、その間の産卵から羽化までの所要日数は、5月から6月にかけては42日間、7月は39日間となっている。

このような周期で継続して発生をすれば、4化が9月の20日ごろ、5化が10月下旬から11月上旬に羽化することになる。

1978年6月15日、7月16日、7月25日、8月23日、10月8日の5回に亘って上郡町の生息地を訪れたが、毎回全ステージで本種を観察することができた。順調に発生を繰り返せば、羽化までの所要日数約40日から想定して、5月上旬、6月下旬、7月下旬、9月上旬、10月中旬の年5化が考えられる。しかし中には成育が遅れる個体もあり、秋期には第4化のものと第5化のものが混飛することも充分考えられる。

表2. 月別採集数表

	4			5			6			7			8			9			10			11		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
含			1	24	1		20	16	12	14	8	2	4	1		2	2	6	108	56		1		
♀				15			8	4	6	7	4		3			2		5	38	67				

9. おわりに

県下に於ける本種の分布を主題に、生態面での新知見を併せ述べてきたが、何分にも筆者が浅学ゆえに、取り留めのない報告となってしまった。

食草と分布との関連、歴史的経過、地理的要因など未解決の問題が山積されているが、これらの諸問題については先学諸氏の御教示、御指導を仰ぎながら、解決して行きたいと考えている。

末筆ながら本稿を草するに当り、ペンケイソウ科植物について御教示いただいた家永善文・三木順一・湯浅浩史の諸氏に感謝申し上げる。また貴重な文献を御恵与下さった原聖樹・牧林功の両氏と、いつもながら御支援、御助言をいただいている飯尾理郎・石塚棋法・岩村巖・宇野正紘・尾崎勇・木村三郎・新川勉・高島千洋・高田忠彦・山本広一の各氏、採集記録を提供いただいた相坂耕作・入江照夫・石井為久・川崎悟良・佐々木薫・苦木隆幸・花岡正・広利雅美・松村邦正・唐士洋一・森下泰治・八木弘・矢代武の諸氏にお礼申し上げます。

10. 参考文献

- 赤枝一弘(1959)岡山県におけるクロツバメシジミの生活史, 新昆虫・Vol. 12No. 4
 岩村 巖(1977)西播のクロツバメシジミについて、てんとうむし, No. 5・P. 2
 神戸新聞社学芸部(1974)兵庫探検自然編、神戸新聞社、(兵庫)
 朽木史郎(1977)兵庫の城、神戸新聞出版センター、(兵庫)
 丹下 仁(1955)クロツバメシジミの越冬生態, 新昆虫・Vol. 8 No. 5 P. 52
 ひょうご町並み研究グループ(1977)兵庫の町並み、神戸新聞出版センター、(兵庫)
 紅谷進二(1971)兵庫県植物目録、六月社書房、(大阪)
 松井俊公(1955)兵庫県粟粟郡の蝶相、兵庫生物・Vol. 3 No. 1～2 P. 34
 山本広一(1958)小野市の蝶を語る、兵庫生物・Vol. 3 No. 4 P. 254
 (MASAMI HIROHATA) 〒671-22 姫路市

室津の異常型アオスジアゲハ

入江 照 夫

1978年5月14日と15日の両日、相生市の南接地、揖保郡御津町室津でアオスジアゲハ春型の異常型を採集することが出来た。

1 昨年春ナガサキアゲハを採集した折アオスジアゲハが多く乱舞していたのを思い出し採集に出かけた。

遊女友君の眠る岬の日溜り、浄運寺裏のネギ坊主に集って来るのを2日にかけて♂28♀5の33頭を採集した中の4頭に異常が認められた。

前翅中室先端に青緑紋を押し分ける様な形で同色の紋が並んでいる。

その異常な青緑紋の大きさは、長さ7ミリのものが♂♀各1頭と、3ミリの♀が1頭、異常紋と容認出来るものの♂が1頭と計4頭に異常が見られる。

強引ではあるが異常型出現の確率にすれば6%~12%であると言えるかも知れない。

ちなみに前翅外縁の白紋について観測すると、前翅裏面の外縁全長に亘って白紋があるものが33頭中4頭あり、裏面外縁全長ではないが表翅にまで浸透しているものが6頭あった。

他に前翅後縁の幅と、青緑紋の幅とを16室で長さの割合を比較対象してみたところ、面白いデータが得られているが、夏型と同数対象させてみた方がより面白いと思う。

来夏は再び友君の地をたづねて、この問題を押し進めて行きたい。

キチョウの雌雄型

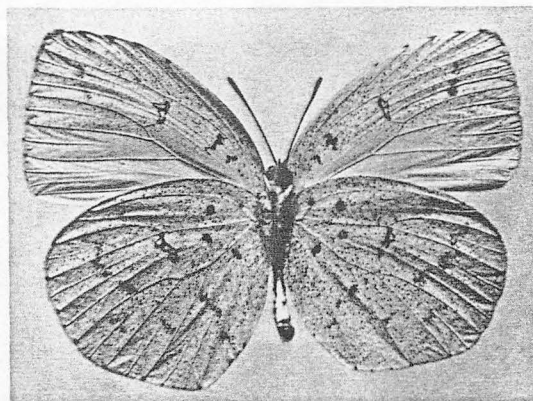
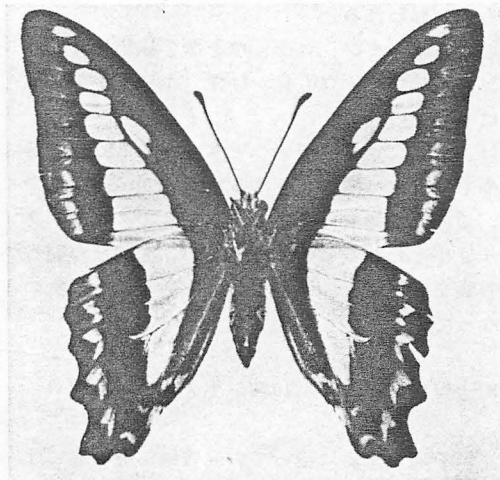
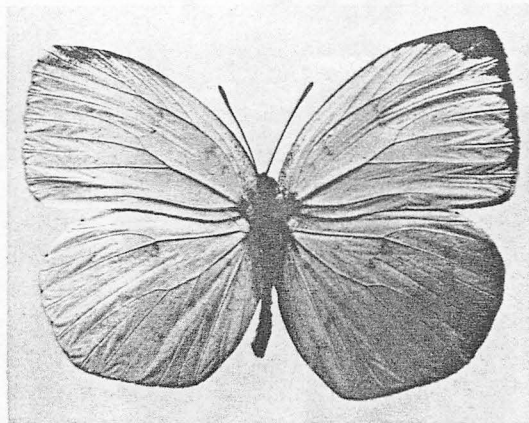
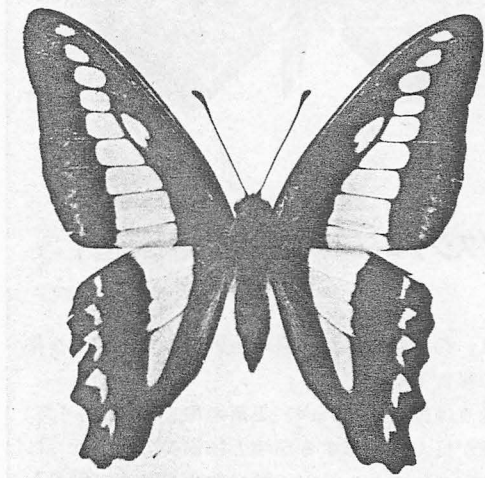
入江 照夫

1977年9月15日相生市矢野町小河で採集したキチョウを整理していると非常に多くの変化が見られる。

時期的に夏から秋への移行時であるせいもあるが採集されたキチョウも夏型、秋型、夏秋中間型ありで一日で採集される蝶で個体変異のこれほど多様な蝶は他に類をみないのではないか。

その中の一頭に雌雄型の異常型があった。秋型であるが右翅が♂で、左翅が♀である。

写真では判別しにくいと思い異常の度合を記す。両翅共♂♀特有の特徴を完全に備えており、♂特有の前翅裏面中室下方の翅脈両側にある性紋と外縁の黒帯、翅地色の黄色の濃淡などが完全に左右の翅で雌雄に分かれている。採集時の状況、幼虫の採集等から、この個体の食草はカワラケツメイと考えられる。



(TERUO IRIE) 〒678 相生市